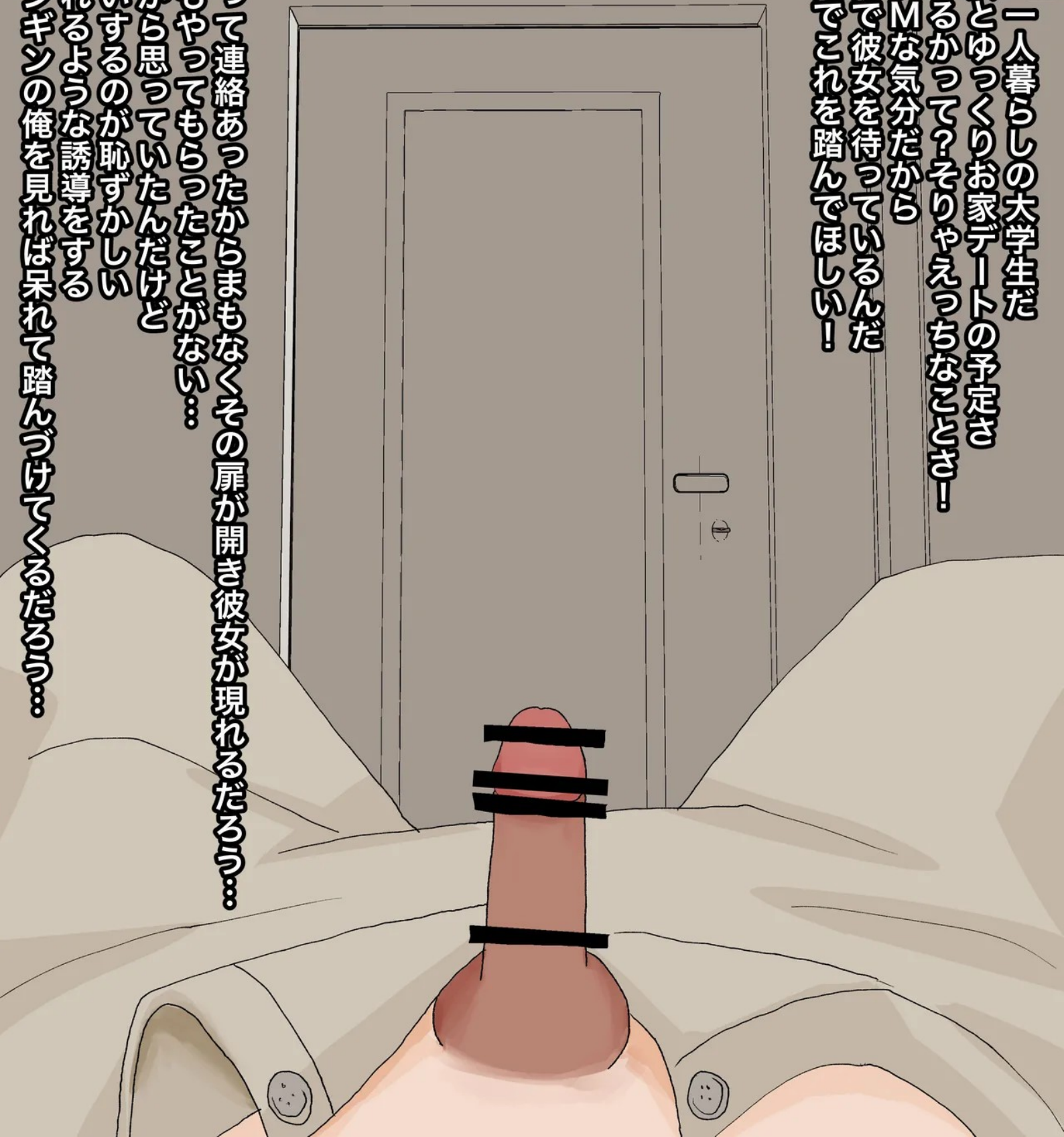


純粹な彼女に  
踏んでもらったり



僕の名前は布村幸太 一人暮らしの大学生だ  
今日は休日だから彼女とゆっくりお家デートの予定さ  
お家デートって何をするかって？そりゃえっちなことさ！  
今日は責められたいドMな気分だから  
こっしてふざけた格好で彼女を待っているんだ  
まずは靴脱ぎたての足でこれを踏んでほしい！

さっきももうすぐで着くって連絡あったからまもなくその扉が開き彼女が現れるだろう…  
実は足コキはまだ一回もやってもらったことがない…  
やって欲しいとは前々から思っていたんだけど  
やっぱりちよっとお願ひするのが恥ずかしい  
だから自然に足コキされるような誘導をする  
昼間っから丸出してギンギンの俺を見れば呆れて踏んづけてくるだろう…

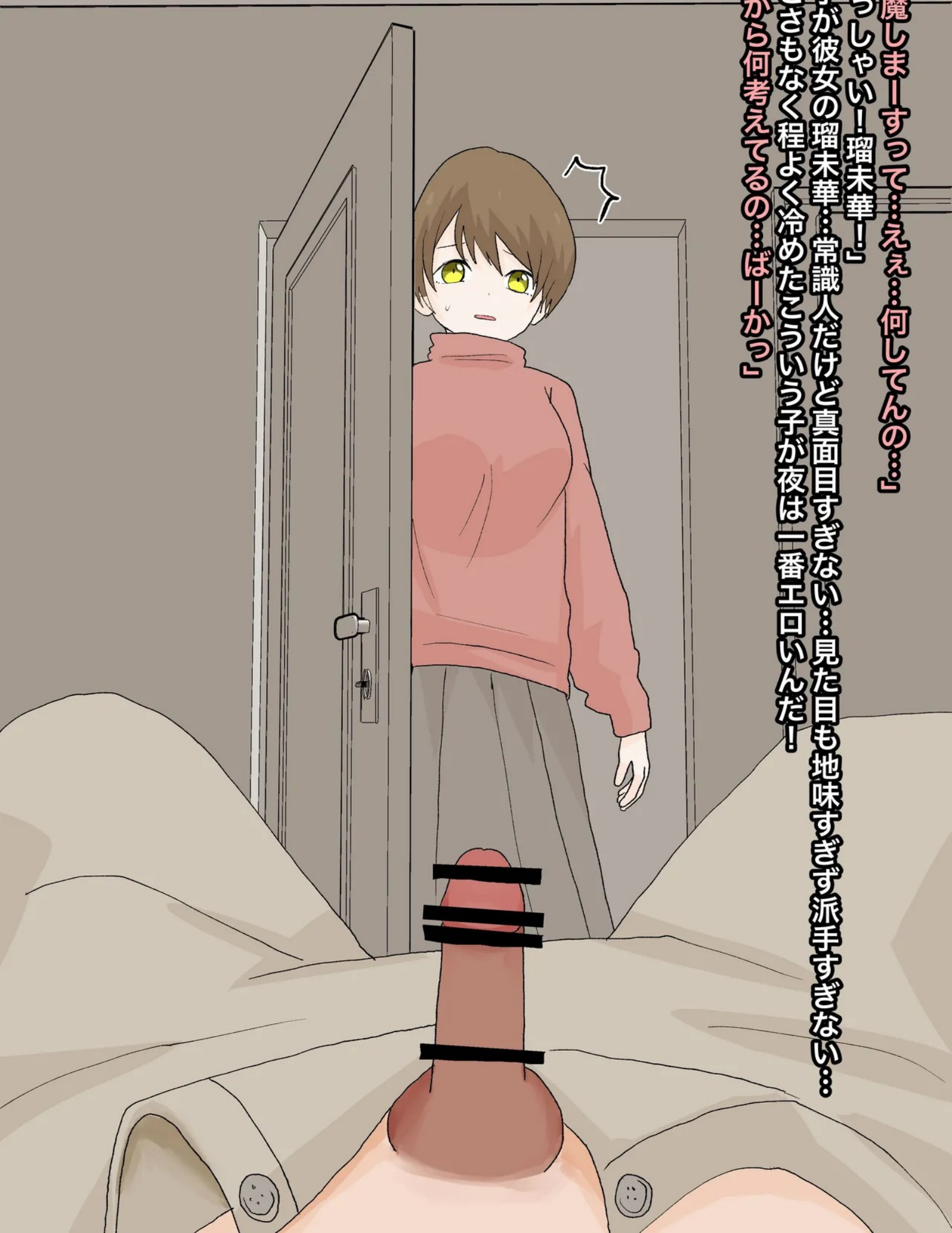


「お邪魔しまーすって…ええ…何してんの…」

「いらっしやいー瑠未華！」

この子が彼女の瑠未華…常識人だけど真面目すぎない…見た目も地味すぎず派手すぎない…あざとさも程よく冷めたこっぴつい子が夜は一番エロいんだ！

「昼間から何考えてるの…ばーかっ」



「はあはあ！黒ソックスだ！やっぱり靴下は黒だよなあ！」

「はっ？何言ってるの？」

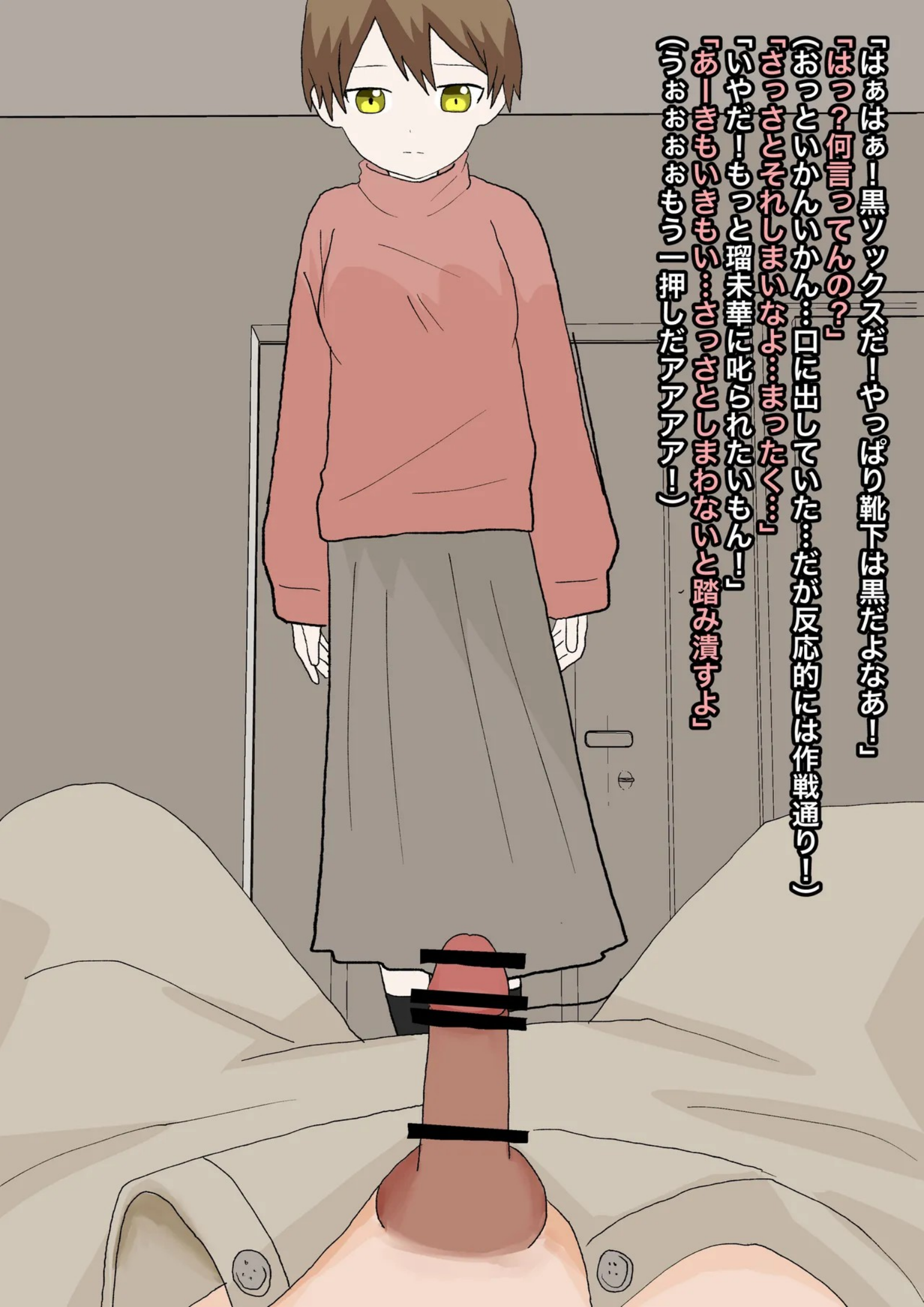
（おっといかんいかん…口に出していた…だが反応的には作戦通り！）

「さっさとそれしまいなよ…まったく…」

「いやだ！もつと瑠末華に叱られたいもん！」

「あーきもいきもい…さっさとしまわないと踏み潰すよ」

（うおおおもうー押しだアアアア！）



「早くしまえって言うてんの!」

(きたああああ! 作戦通り! 馬鹿だなあ〜うちの彼女!)

「…あつあれ? これって普通嫌がって足振り払ったり観念してパンツ履くところじゃ…」

「はあはあ! もっともっと! 足コキ最高!」

ぐいっ

「嘘でしょ!?! キモイキモイツ! 踏まれて喜んでるの!?! 変態!」

「えっへへへ…初めて足コキした気持ち教えてください!」

「いやひたすらにキモイ! 足だよ? 踏まれるって屈辱的な事でしょ?

意味わかんない!」

「いかん…このままでは踏むのをやめてしまっ!」

「そんな事言っつなよー性癖なんだからしょうがないだろ！」  
「世の中には踏まれる事でしか興奮できない人もいるんだぞ！」  
「そ…それは…」  
「失礼だと思わないのかね！」  
「す…すみません…」

うちの彼女アホすぎないか？そんなところも大好きだ！  
しかし踏まれながら謝られるのシチュールすぎる…  
「では続行してくれ！」





「はあ…はあ…もうイキそうだ……足コキ最高！」

「い…イキそうなの…？冗談だよな…？」

「本当だとも！最後は電気あんまみたいに振動するように動かしてくれ！」

「…ムッ？」

「ああああ！上手い！微弱ながらも絶妙な小刻み！ブルブル震えて気持ちいい！」

「やっぱキモイ…でもこれ楽だね…足動かすだけでいいなら生理の時とか助かるかも…」

「溜末華…そろそろマジでイキそう…」

「もう…いつもは手とか口とか使わせてくる上になかなかイかないのに…」

「…なんか…イライラしてきた…」

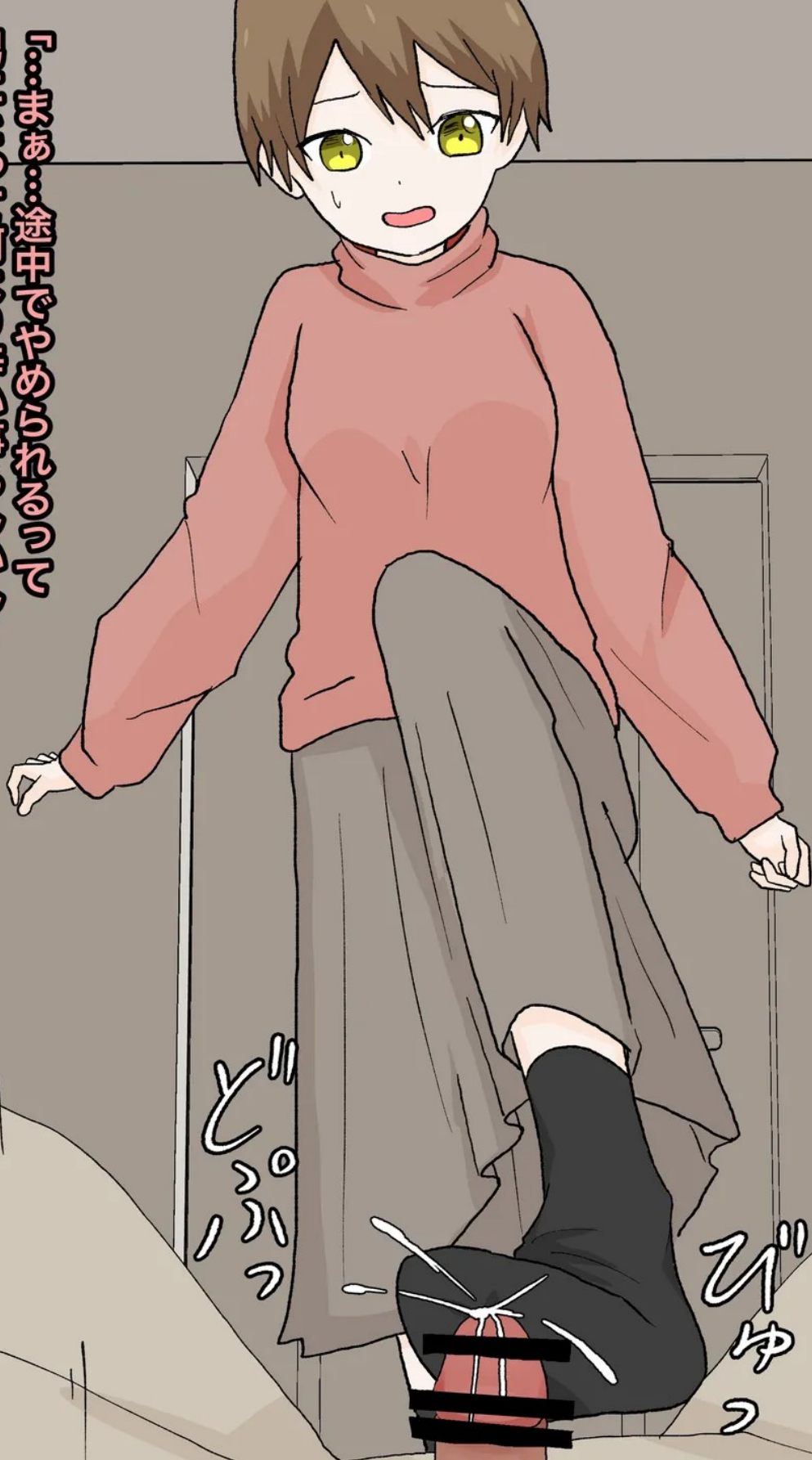
「あああ！なんか強くなってる！溜末華！？」

「うるさい…これがいいんでしょう？さっさとイけば？」

「おおお！サディスティックな溜末華さいこおおお！」



「はあはあ…最後の罵倒は最高だったよ…素質あるんじゃないの?」  
「素質って…今までで一番最悪の気分なんだけど…」  
「でもなんだかんだ最後までしてくる溜未華って本当に最高の彼女だよ!」



「…まあ…途中でやめられるって男にとって何より辛い事らしいし…」  
「溜未華…溜未華最高おおおおお!」  
「ちよつと!足にちんこ擦り付けるな!」

ビクッ

とっパッ

びゅっ

ビクッ

「瑠末華！自分で汚したものは自分で綺麗にするよ！」  
「ちよつと…お腹壊しても知らないからね…」  
「はあはあ！おいしいよ！」  
「気持ち悪い…」

れろっ

れろっ  
ンロレロッ

へ。へ。へ。へ。



「はあはあ…ただの布でも  
瑠未華の足を纏ってるだけで別物だな！」  
「知らないよ…綺麗になったんなら  
もう舐めるのやめてくれる？」  
「え〜もっと舐めてたい…そうだ！」



舐める汚れが無くなったんならまた出せばいいんだ！  
フウウ〜俺って天才！」

「ちよつと馬鹿！なんでまた！？」  
「瑠末華の足とセックスだああ！」  
「本当に私の彼氏馬鹿すぎるよ…！」

「瑠末華！馬鹿馬鹿言ってるじゃないでもう少し強く挟んでくれなにか？」  
「なんでそんな事…ほらっこれどらんの？」  
「おおふっ！ナイス締め付け！」



「おおふっでっ出る...」  
「なんで出したばっかなのにまた出してんのよ...ムカつく...」  
「瑠末華とセックスよすぎる...」  
特にドSでもない彼女の足無理やり借りてエッチするの最高!

「何がセックスよ!」  
勝手に足持って腰振って...  
そんなのオナニーじゃん!」  
「なんだろ? 拗ねてんの?」  
...じゃあ夜は普通にセックスしような!」

「ちや...拗ねて...ならご...」

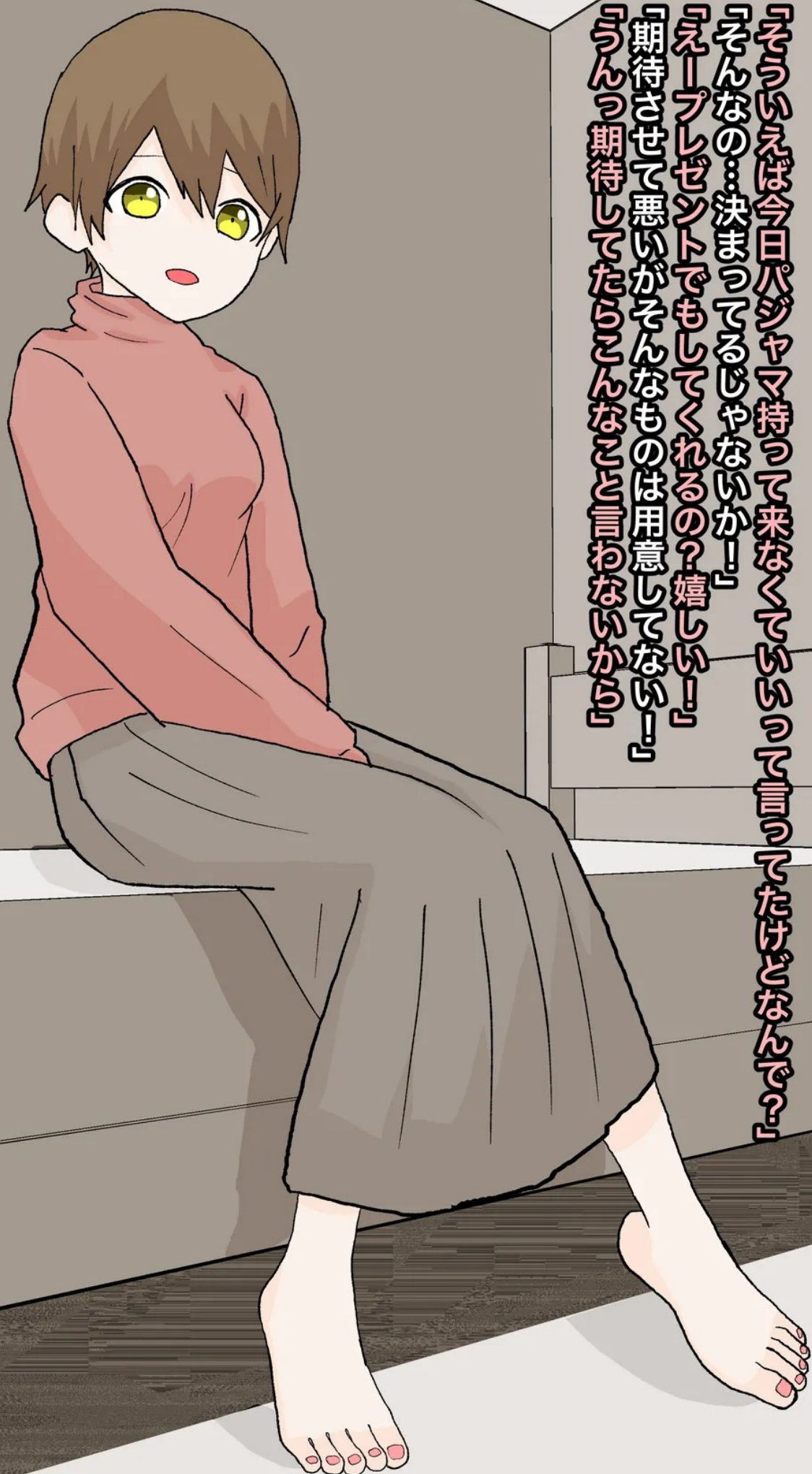




「あー最高ー！いい眺めだ！なんも見えないけどー！」  
「溜末華のいい匂いと俺の臭い精子の匂い混ざり合って興奮がおさまらないー！」  
「なあ溜末華ー汚れてないところも舐めていい？」  
「…もう好きにしたら？」  
「はあはあーていうか溜末華の足顔にフィットしすぎじゃね？」  
「これ運命だよなー？」  
「なんでこんな馬鹿と付き合っただんたろう…！」

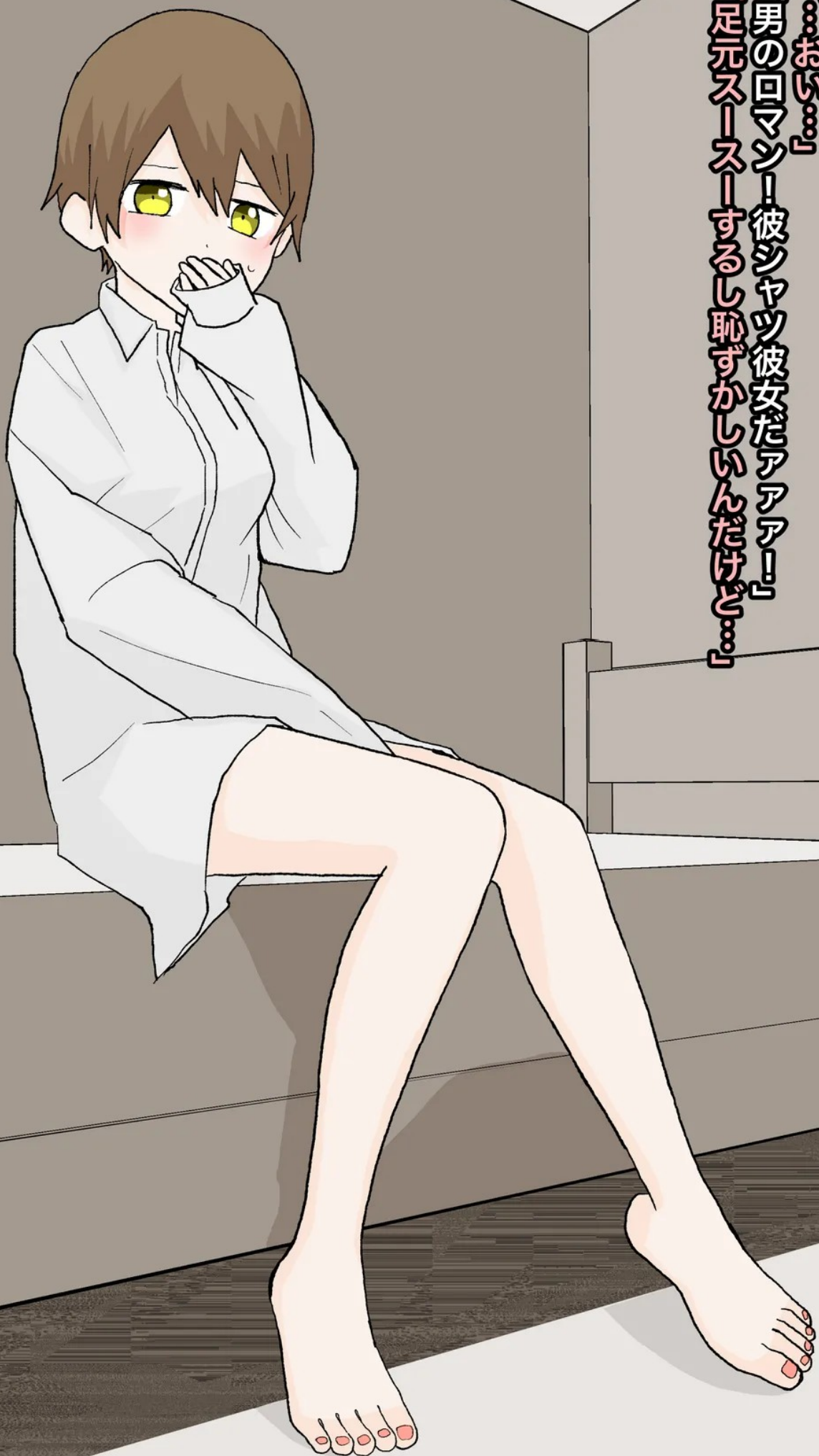
ブーツ  
ハーツ  
レロッ  
ハーツ  
レロッ  
ハーツ  
ハーツ  
ビクッ  
ビクッ  
ビクッ

「そっういえば今日パジャマ持って来なくていいって言うってたけどなんで？」  
「そんなの…決まってるじゃないか！」  
「えープレゼントでもしてくれるの？嬉しい！」  
「期待させて悪いがそんなものは用意してない！」  
「うんっ期待してたらこんなこと言わないから」



「プレゼントは用意してないがこんなものを用意した！さあ着替えてくれ！」  
「えっ！なにになに？やっぱり何かくれるの？」

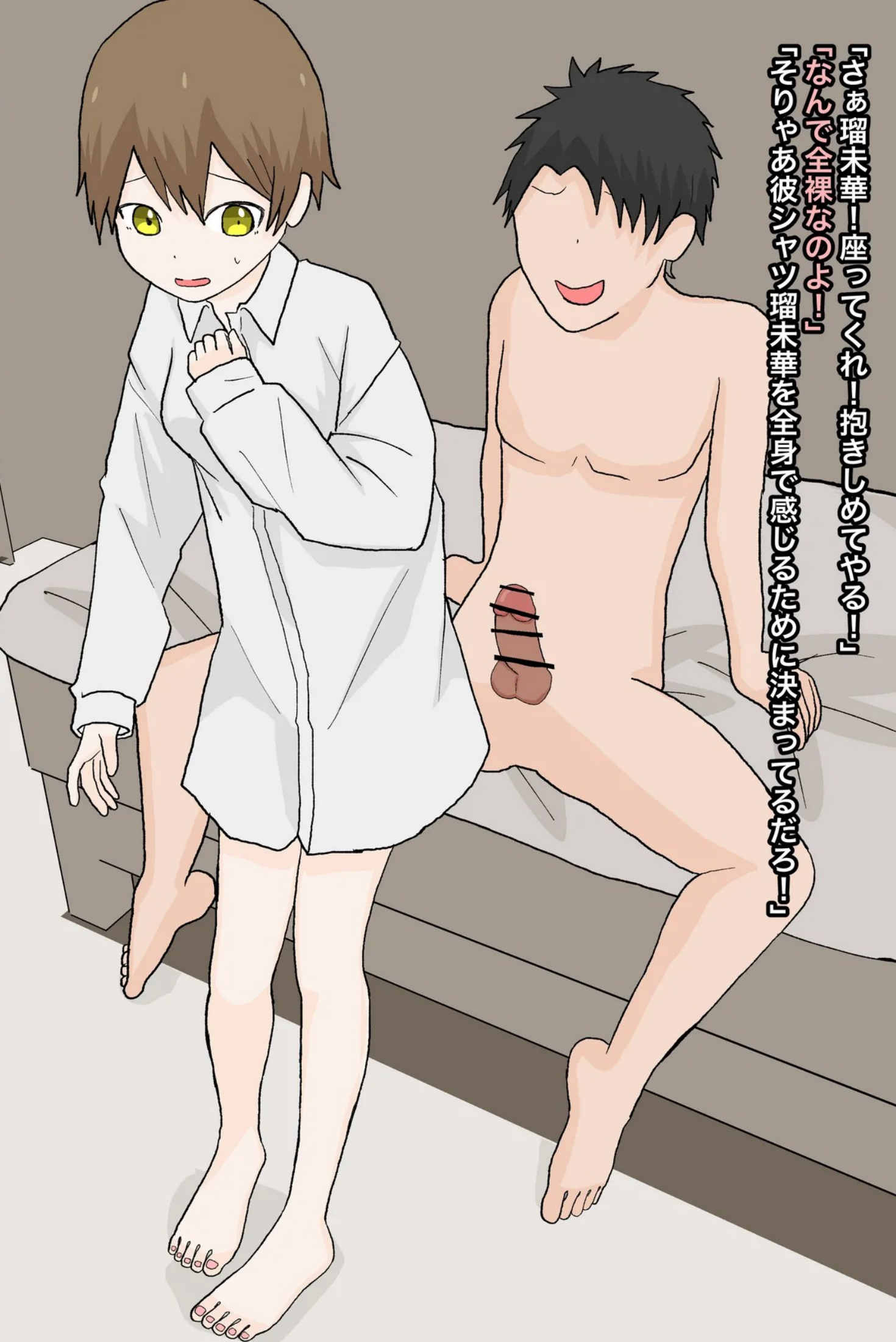
「…おい…」  
「男のロマン！彼シャツ彼女だアアア！」  
「足元スースーするし恥ずかしいんだけど…」

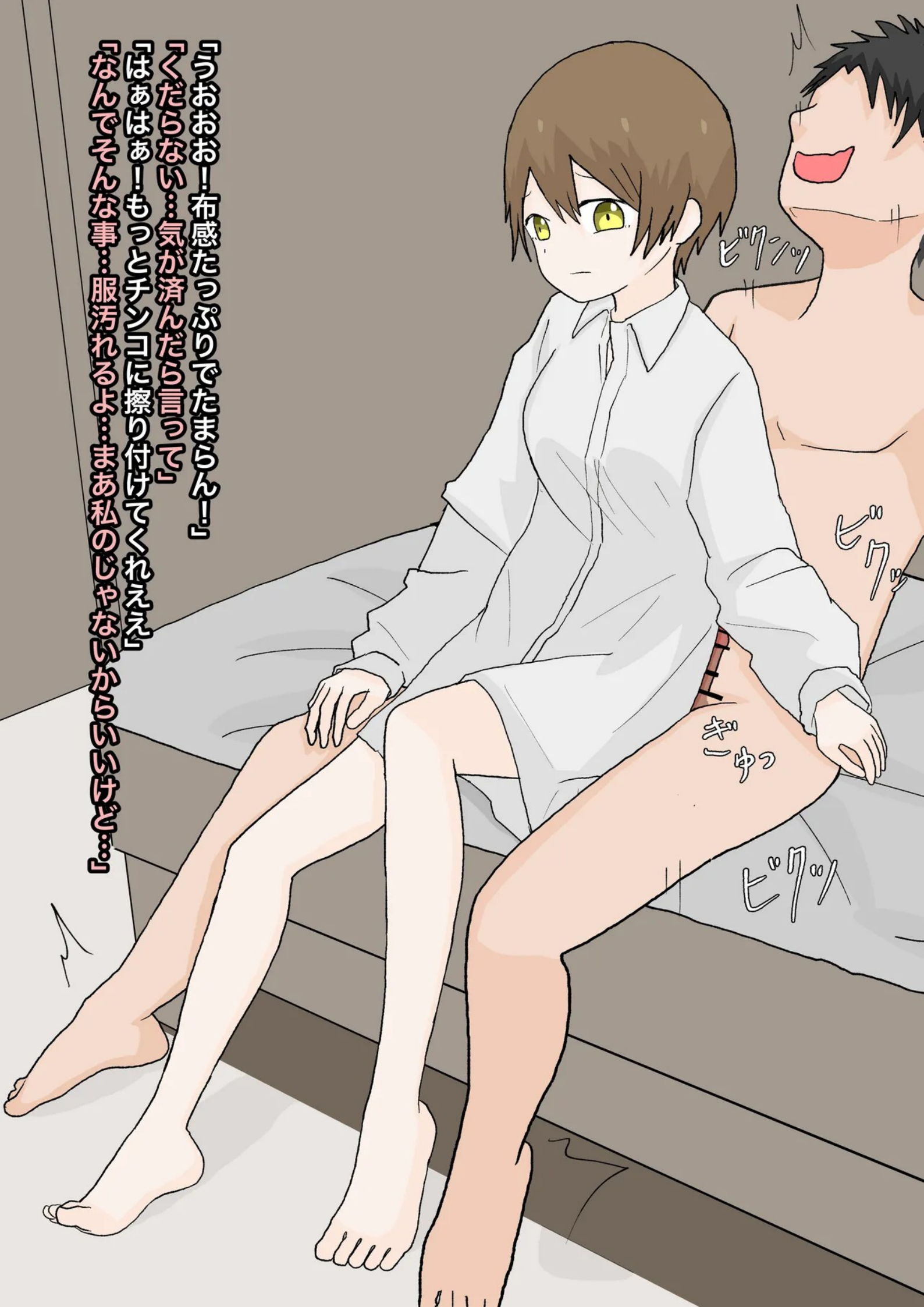


「サイズ感、手の仕草、表情、百点満点だ！計算せずにそうなるんだから恐ろしい子！」  
「ごういうのはもっと女の子らしい子にさせるものでしょ…私なんかにごんな格好させて楽しい？」  
「おおふっ喋れば喋るほど性癖に刺さるの天才か！？」  
「ぼつかじゃないの…」  
「フオオオオオオオオ！」

「さあ瑠未華！座ってくれ！抱きしめてやる！」  
「なんで全裸なのよ！」  
「そりゃあ彼シャツ瑠未華を全身で感じるために決まってるだろ！」

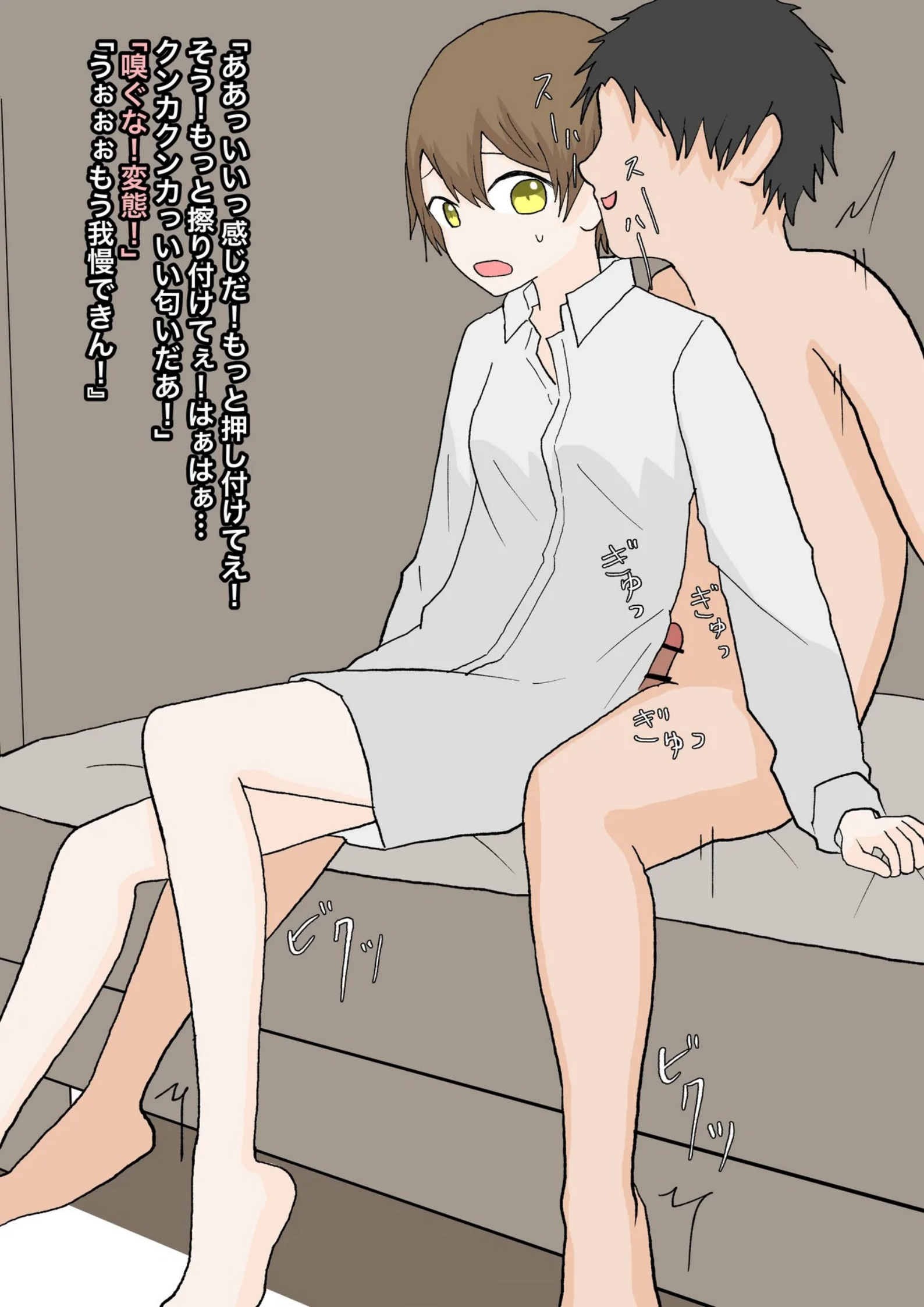
「はあ…ただサイズ合っていないシャツ着てるだけじゃん…」





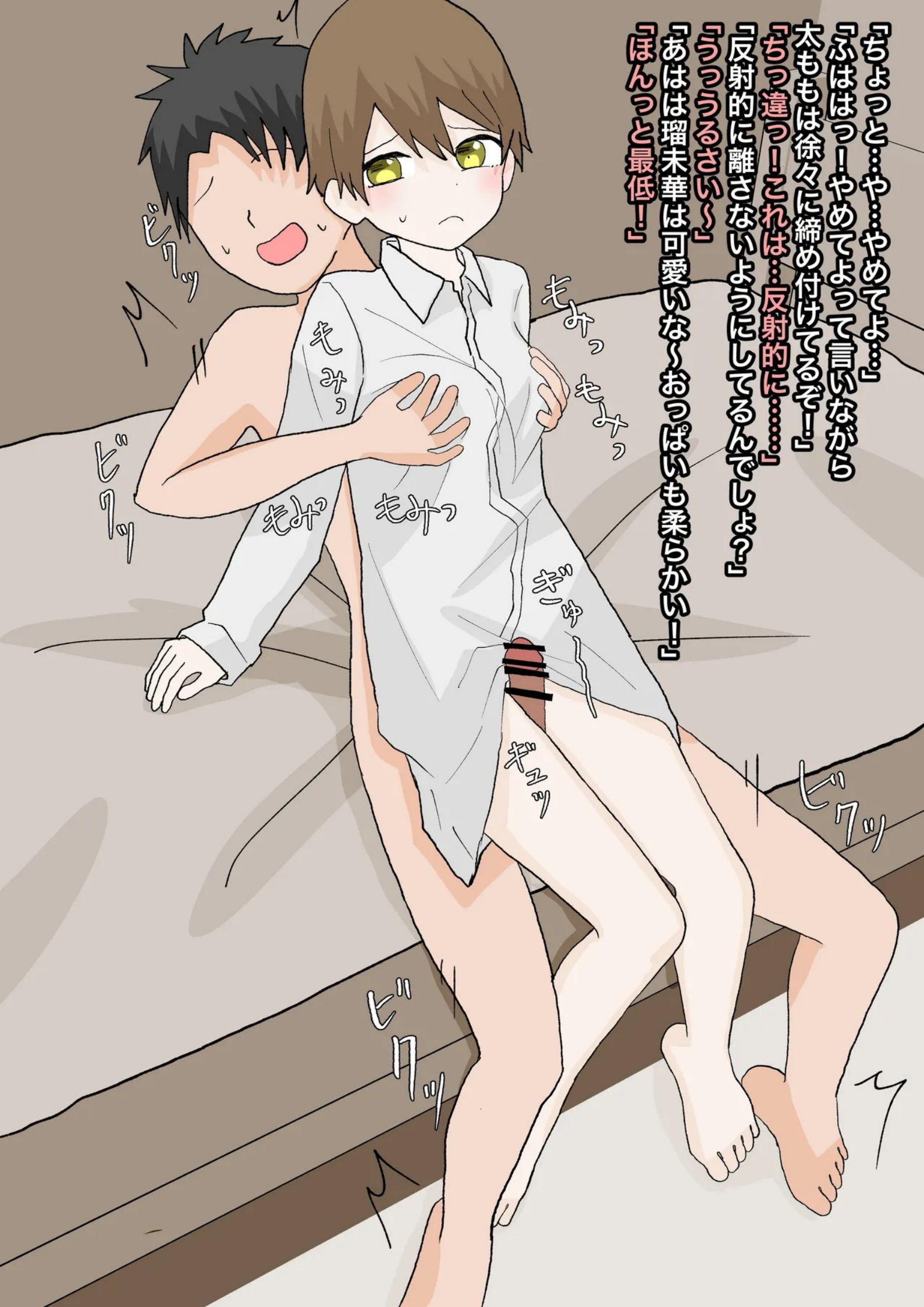
「うおおお！布感たつぷりでたまらんー！」  
「くだらない…気が済んだら言うて」  
「はあはあ！もっとチン」に擦り付けてくれええ」  
「なんでそんな事…服汚れるよ…まあ私のじゃないからいらんけど…」

「ああっいいいっ感じだーもっと押し付けてえー！  
そうーもっと擦り付けてえー！はあはあ…  
クンカクンカっいい匂いだあー！」  
「嗅ぐなー変態！」  
「うおおおもう我慢できんー！」





「ちよつと…や…やめてよ…」  
「ふははっ！やめてよって言いながら  
太ももは徐々に締め付けてるぞー！」  
「ちっ違っ！これは…反射的に……」  
「反射的に離さないようにしてるんでしょ？」  
「うっうるさい」  
「あはは溜末華は可愛いなくおっぱいも柔らかからー」  
「ほんつと最低！」





「...」  
「...」  
「...」



「ふんっ!」  
「ゴフッ!」



「離れ!」  
「...」  
「...」

「踏まれるのも好きなんだし〜う〜う〜う〜のも好きなんでしょ〜」  
「シンツモゴゴ! (顔騎だとお! 普段責められるだけの溜末華がなんて積極的な!」  
「ふう…ふう…(わ…私は何てことを…」  
「でも〜う〜う〜が悪いんだ…このまま髪掴んで動かしてやる…!」



(溜末華が頭掴んでゆっゆっゆっしている!)  
動きに微妙に戸惑いがあるのが可愛いなあ〜  
「はあはあ…鼻とか口とか…擦れて…変な感じ…」

「よし舌入れたる！」  
「ちよつつ馬鹿っ今は…」  
「えへへへっもうグチユグチユだねえ溜末華」

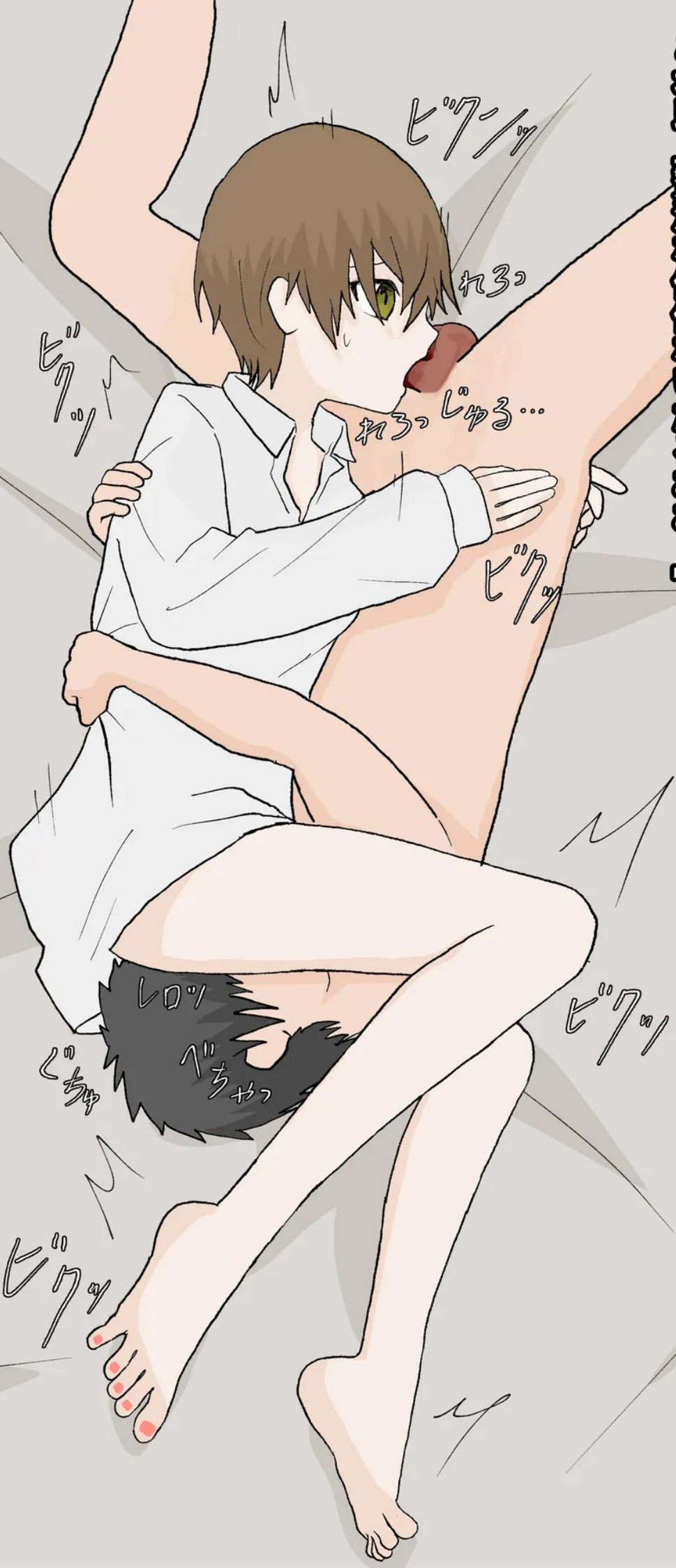


「もう…なんでこう逆転されちゃうかなあ…」  
「溜末華は本当弱いなあ〜よじっトドメの舌高速回転だああ！」  
「きゃっ急に早く!?嘘っ!?ちよつとまってよおお！」

「いやっダメえええっんんん！」  
「いった！ぐふふ人の顔に跨って気持ちよくなるのは  
なんとけしからん娘だ！もっと舐めてやる！」  
「やっやめてって！ごめんっ謝るからあ！」  
「謝はるだけじゃ許さん！」  
「じゃっじゃああんたのも舐めるからあ！」  
「よし！和平成立だああ！」



「んっんっんっ」  
くっくっくっ最高〜！口でおまんこ可愛がりながら胴体には  
シャツが密着して股間は口で奉仕されて…  
これ以上贅沢な体位ないだるおおー！」



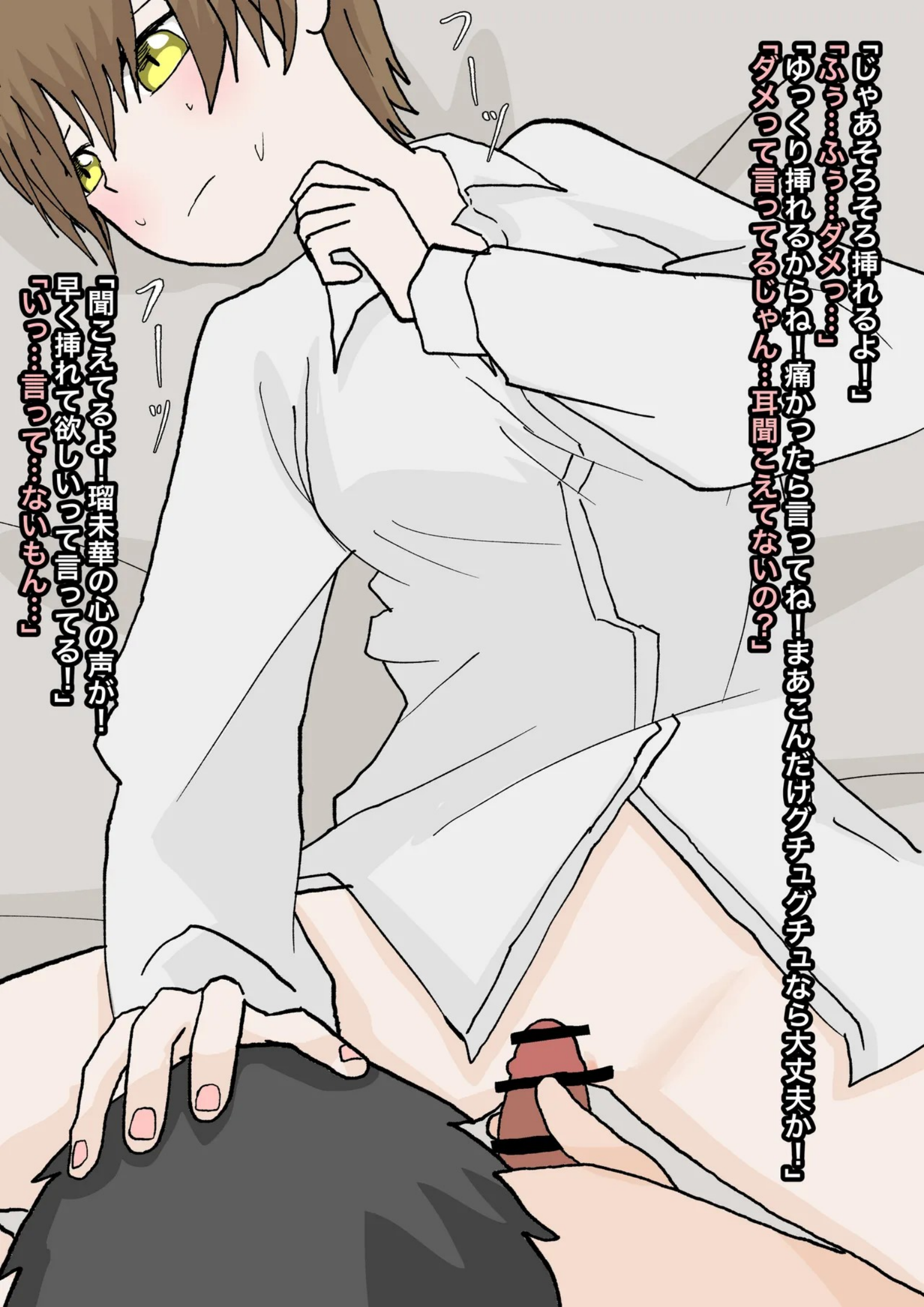
「んんっんっ！(また容赦なく弱いところ連続で舐めてくる…  
私だけ気持ちよくさせられて悔しい…負けないもん…)」  
「ひゃっチン」喉奥まで行ってならかっやばらっわは…」





「じゃあそろそろ挿れるよ!」  
「ふう…ふう…ダメっ…」  
「ゆっくり挿れるからね! 痛かったら言っつてね! まあこんだけグチュグチュなら大丈夫か!」  
「ダメっつて言っつてるじゃん…耳聞こえてないの?」

「聞こえてるよ! 瑠末華の心の声が!」  
「早く挿れて欲しいっつて言っつてる!」  
「いっ…言っつて…ないもん…!」





「素直になりなよっえいーずぶっ!」  
「うっうっうっ……挿れるなって言ってるのに……」  
「はあああ〜いつ挿れても最高だなあ〜瑠末華の中は! あったかくてぬいっとりっ!」  
「うるさいうるさい! 死ね!」  
「じゃー挿れたり抜いたり出したり抜いたりするねー!」  
「ひぎっ……んんんっ〜!」

はっ

びびっ

びびっ

はっちゃん

はっちゃん

はっちゃん



「アアツイクー瑠未華——ツツツツツ」  
「きらいから…名前呼ぶな！」

はあ…

はあ…

「はあはあー瑠未華が可愛いすぎたからこんなになっちゃった…」  
「で…出過ぎじゃ…らっしもよろ…」  
「またその服装でやらせてねー！」  
「…らっら…げっ…」

ヒュ  
ヒュ  
ヒュ

ヒュ  
ヒュ

ヒュ  
ヒュ





「それにしてもパーカー  
似合ってるね〜萌袖も可愛い!」  
「そ…そう?」  
「そうだ!袖にちんちん入れている?」  
「は?何言ってるの?そんな汚い事」  
「汚いだとお?もう怒った!」  
「無理やり入れてやる!」



「えへへー入っちゃった〜！ちよつとパーカーの生地摩擦が刺激強かったけど無理やり入れちゃったもんねー！」

「最低っ！もう…あんたが喜ぶと思ってこの服装にしたのに…」

「えー！？喜んでるよう…このチン」の硬さが何よりの証拠だよー！」

「そうじゃなくて…もうパーカーとセックスしたら？私なんていらんじゃ…」

「そんな事ないよ！俺はパーカーが好きなんじゃなくてパーカー着てる

「…回ばっから…」

しゅっ

しゅるっ



「溜未華！金玉も軽く握ってくれないか？」

「このまま握りつぶしてあげようか？」

「ははは！握りつぶしたらもう

セックスできないぞ〜？」

「いいよ…別に…」

「あっ溜未華！また奥まで行っちゃった！」

「何が奥よ…くだらない…」

「ぬぬぬ〜」

ギョウッ  
ギョウッ

ナニわッ  
×わッ



「さっきからなんだ！その態度はー！むきー！」  
「ちよっとーチンコで顎クイしなれよー！」

「えー？でもこの前顎クイに憧れるって言ってなかったっけ？」  
「こんな最低な顎クイあるか！」  
「とにかく生意気な瑠未華にはわからせてやらないとなー！」  
「わからせるって…何を…」



「よしっぴやあまずはちんちん全体を溜末華のよだねで濡らして…」  
「シググッ？んんっっ！」  
「今回は奥まで入れなくていらよ〜舌で全体を舐め回してくれ！」

「はははっなんだかんだ舐めてくれる溜末華やっぱり最高だ！」  
「んんっっれるるる…」



「滑りが良くなったらチンコを顔全体に塗り込むように擦り付ける！」  
「ふざけっ！本当の意味がわかんない！」  
「ああ〜ツ瑠未華のほっぺすべすべだなあ〜」  
「人の顔をツモノみたいに扱って…酷いっ！」

「やばい出そう！瑠未華！右目閉じて！」  
「ちよっちよっ」と！」



「あああああつっ出しちゃった〜！  
瑠末華の頭無理やり掴んでほっぺで擦り付けて出しちゃった〜！  
離してっ！頭おかしいんじゃないの〜！」

「よーし次はどこに擦り付けようかな〜！  
「ちよっ…」回落ち着いて…」



「髪の毛だな！ーサラサラな髪の毛に精子トリートメントしてあげる！ー」  
「もう勝手にして...」  
「あつでもごめん出したばっかだからあんまり出ないかも！ー」  
「謝るところおかしから！ー」



ビュルルル

「はっつー出るっつー」  
「もう最悪の気分…ベタベタするし臭いし…」  
「よーし…はあはあっ次はくつと」  
「まだ私の顔に擦り付ける気なのー?」



「んじはどつだ？耳「キ」新しー！」

「変なところ擦り付けないで！」

「おおふっ耳「キ」いいじゃん！」

複雑な形だけとそれが無造作に「リ」「リ」と刺激して気持ちいらー！」

「なんでもありがよ…ううっ」  
「ねえっこのまま耳に出していい？」  
「はっ？やめてよ…せめて顔にかけてっ」  
「そんなに顔にかけてほしかつたのか！」  
「そうとは言っていないっ！もうっ馬鹿すぎっ！」





「る…瑠未華!?!今なんて!?!」

「別れるって言ったの!」

「顔面に精子塗りたくる彼氏とかおぞましいわ」

「そんなく捨てないでくれよ〜!」

「さっさと消えてくれない?」

「10秒以内に出てかないと金玉蹴り上げるから」

「出てく…って…ここ俺の家…」

「こっ細かい事はいいから」

「とりあえず私の前から消えて!」

「…分かったよ…」

「…ほっほら分かったんなら早く…」

「…どやり…」

げしっ



「やっぱり、捨てないで〜」

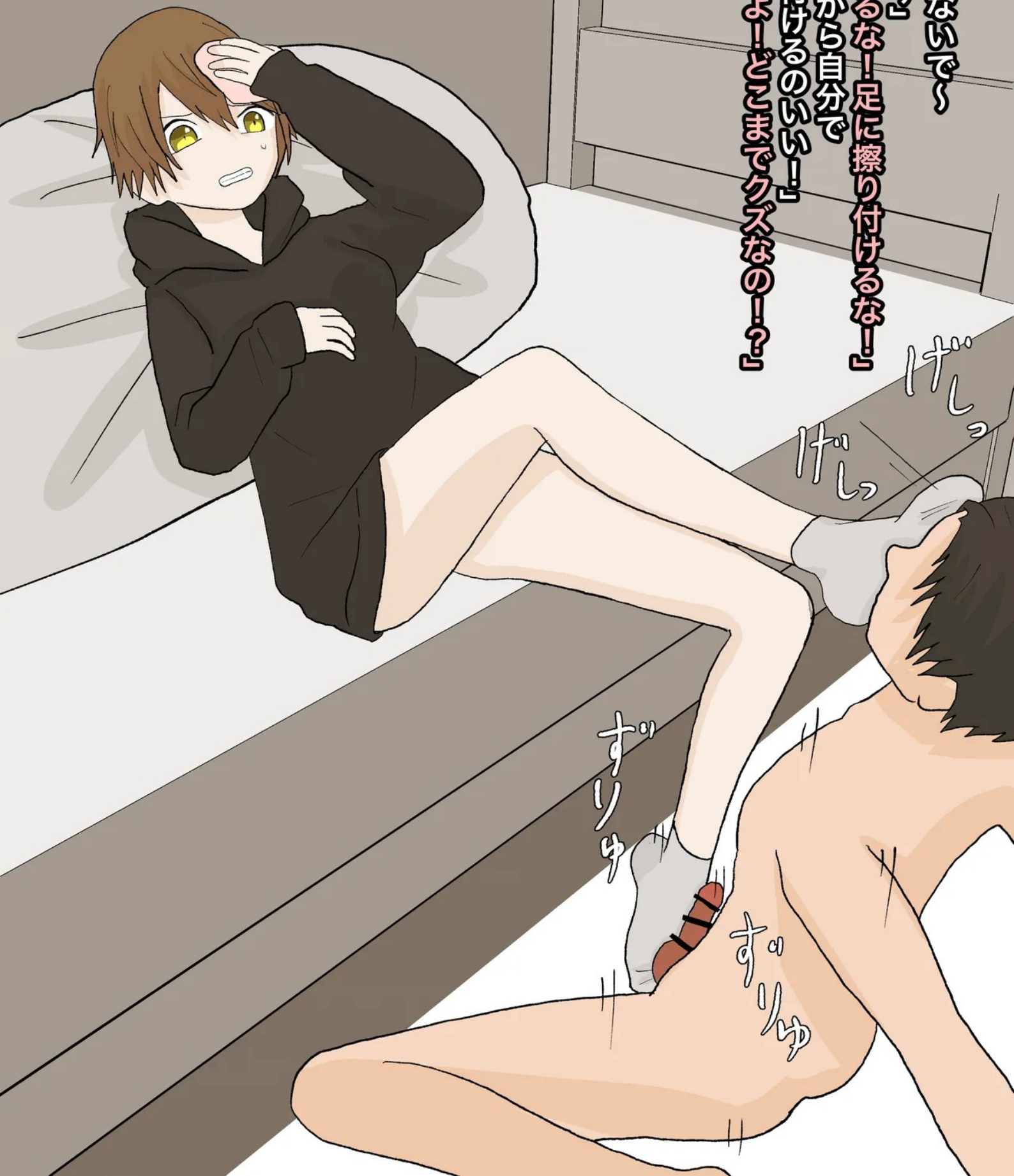
「この通りだから〜」

「ちよつ腰上下するな！足に擦り付けるな！」

「あつ顔踏まれながら自分で」

「足にチン」擦り付けるのいいー！」

「状況考えなさいよーどこまでクズなのー？」



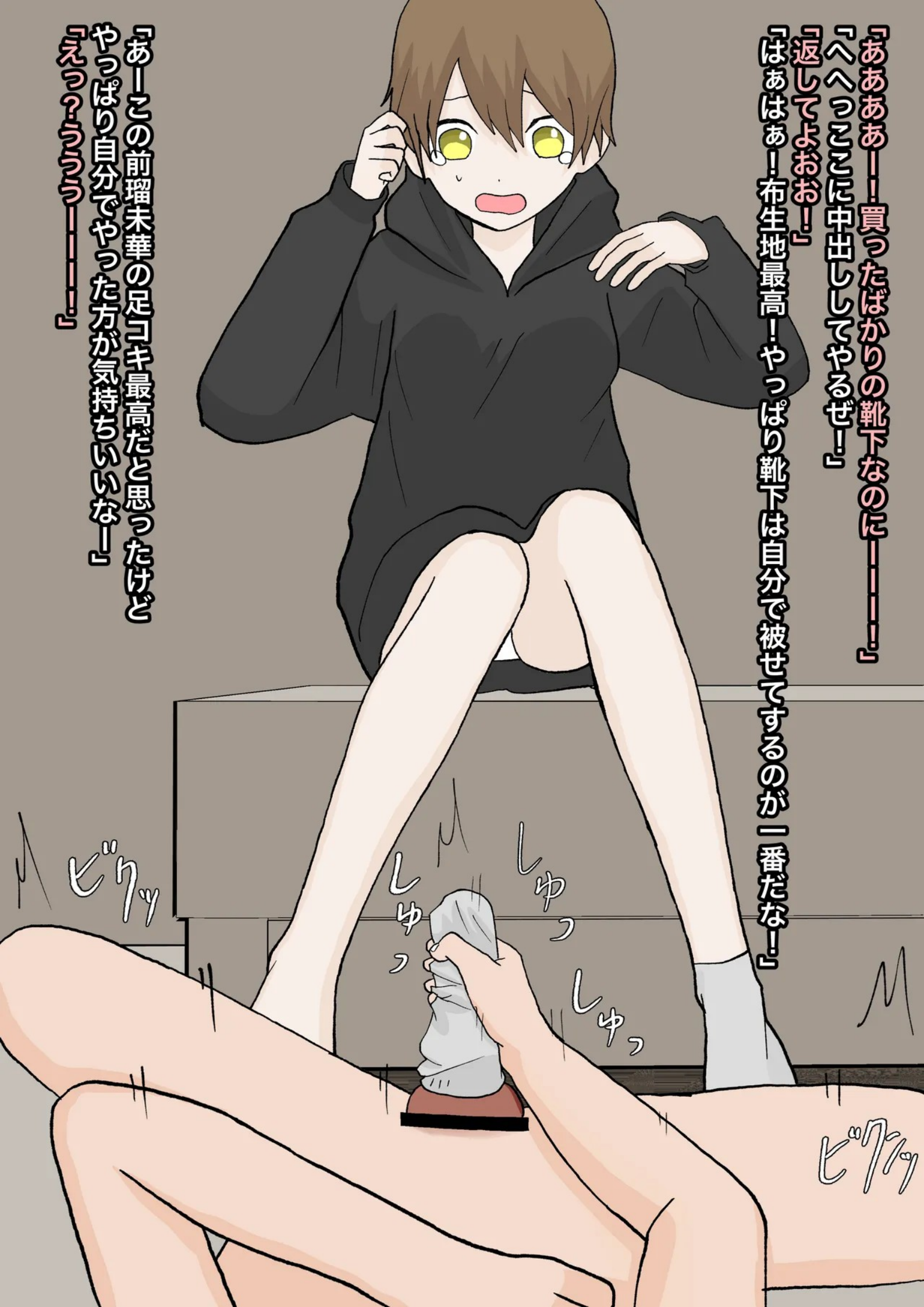
「もう我慢できん！顔にかけるのがダメならこれもらっせー！」  
「ちよつと！靴下！なんでそうなるの！？」



「ああああー！買ったばかりの靴下なのにー！」「へへっごまに中出ししてやるぜー！」「返してよおおー！」

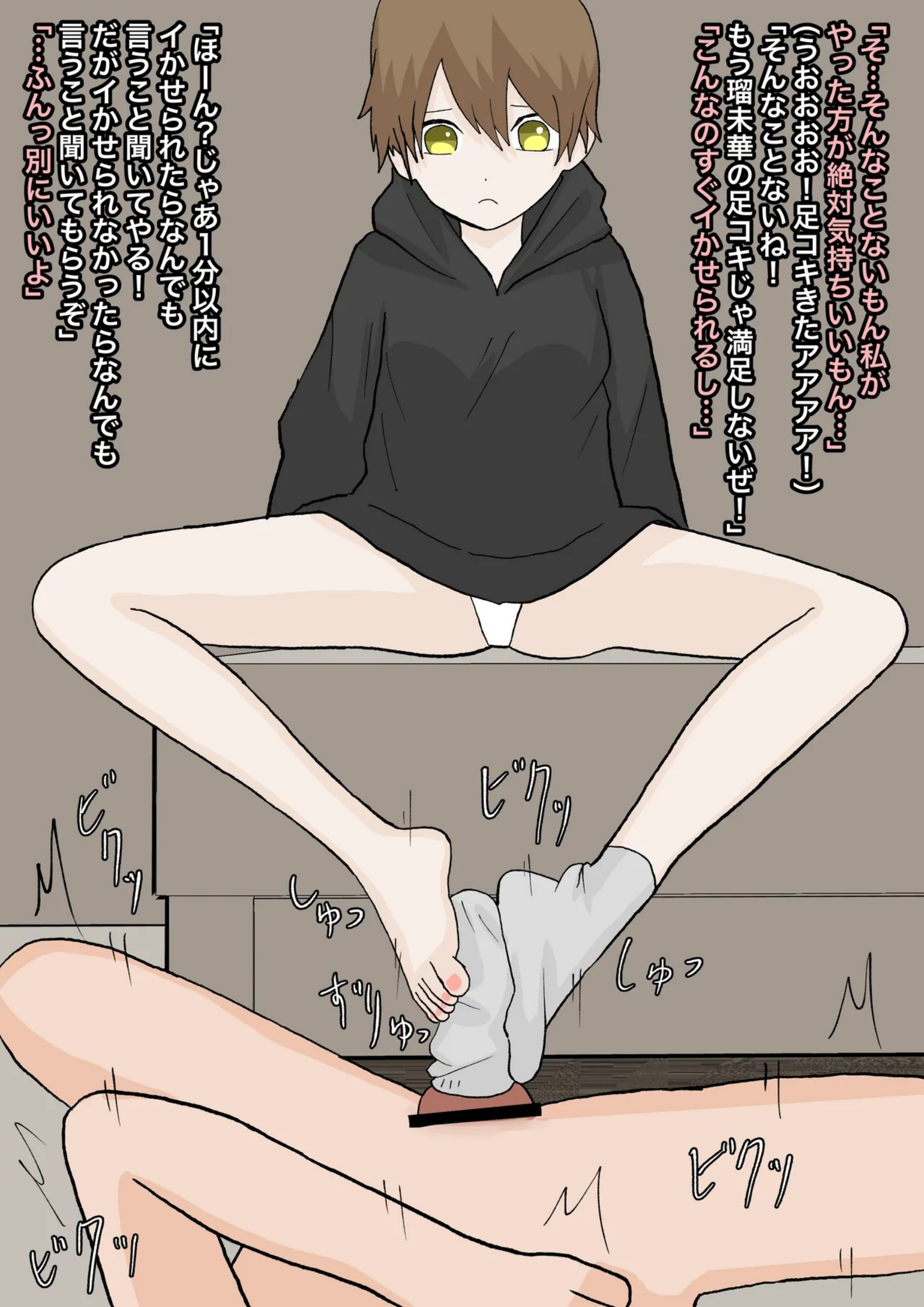
「はあはあー！布生地最高！やっぱり靴下は自分で被せてするのが一番だな！」

「あーこの前瑠未華の足コキ最高だと思ったけどやっぱり自分でやった方が気持ちいいなー！」「えっっっっっっっ！」



「そ…そんなことないもん私が  
やった方が絶対気持ちいいもん…」  
「うおおおおお！足」キきたアアアア！  
「そんなことないね！  
もう瑠末華の足」キじゃ満足しないぜ！  
「こんなのすぐイかせられるし…」

「ほーん？じゃあ一分以内に  
イかせられたらなんでも  
言うこと聞いてやる！  
だがイかせられなかつたらなんでも  
言うこと聞いてもらうぞ」  
「…ふんっ別にいいよ」



「えっちよつと待つー!？」  
「どうしたの?急に驚いた顔して...」  
「いやっその...」

が  
り  
ゅ  
っ

し  
ゅ  
っ

し  
ゅ  
っ

が  
り  
ゅ  
っ

ち  
ゅ  
っ

ち  
ゅ  
っ

が  
り  
ゅ  
っ



「ちよっ待ってっイグううううー!」  
「…30秒も我慢できなかつたね」  
「いっいつの間にごんなに上手く!?!」  
「いやっこっちも無理やり  
やらねまぐってるご  
弱いとこわかってくると言っか…!」

「なんでも言うこと  
聞いてくれるんだよね?」  
「えっと…その…」

「ははっもう取り消せないよ」  
「じゃっこれからは射精管理するから」  
「じゃ!?!射精管理!?!」  
「まあいい子にしてたら一週間に  
一回足で抜いてあげるから」

「そっそんなあ…!」

「その制欲にまみれた汚い頭教育してやるから覚悟してね」

